

「文学を見せること」をめぐる覚え書き

山下真史

本稿は、「神奈川近代文学館年報 二〇一九年（令和元年）度」（二〇二〇年七月、県立神奈川近代文学館）に発表した「文学を見せること——中島敦展 魅せられた旅人の短い生涯」を觀て——」を元に、新しく書き直したものである。重複する部分もあるが、この問題についての現在の所見を述べたものである。

美術は一般に絵画や彫刻などの作品を見て鑑賞するもので、美術展はその鑑賞のために開かれる。版画など、ほぼ同じ物が複数ある場合を除いて、作品は世界中にひとつなので、美術展以外で実物を鑑賞することはほとんど出来ない。一方、文学は作品を読んで鑑賞するもので、本、または文字が読めるメディアがあれば、基本的に事足りる。では、文学の展覧会はなんのために開かれ、人は何を目的に来るのだろうか。

文学の展覧会でよく展示されるものを列举するとおお

よそ次のようなものになるだろう。作家の手書きのもの（原稿、草稿、メモ、手紙、日記、色紙など）、作品が初めて載った雑誌（初出誌）、単行本、その挿絵、作家や周辺人物の写真、作家の使った筆記用具や机、蔵書、衣服、所蔵品など。これらを展示する意味を中島敦を例にしなから考えてみよう。

一 モノの展示

作家の手書きの草稿・原稿類、手紙などは、全集などでは活字化して収録することがほとんどである。清書原稿で一旦書いた文字を消して書き直した程度の推敲なら、活字化しても分かるだろうが、何度も手直しているような場合は、再現不可能になる。また、活字は、文字情報以外は伝えないが、手書きのものは、書き手の性格、そのときの心情など、文字情報以外のものも伝えることがある。近代では、作品は、手書きの文字が活字化され、

雑誌や本に収録されて読者に届けられるわけだが、原稿類を見ることは、最終形に至る過程を追いかけることが出来、作品の理解に資することがあるだろうし、作家の思考を想像することも出来よう。

二〇一九年の中島敦展では、遺稿の「李陵・司馬遷」が展示されていた。この作品は、従来「李陵」として知られていたものだが、筆者は、村田秀明氏と遺稿を校訂し直し、二〇一二年に『中島敦『李陵・司馬遷』図版篇・定本篇』(二〇一二年、県立神奈川近代文学館発売)として上梓した。この草稿・原稿や創作ノート類が展示されていたが、ノートや地図の書き込みからは作品が生まれ出されていく現場を覗くことが出来るし、おびただしい推敲の跡が残されている草稿をじっくりと見ると、敦の思考過程を追うことが出来る。

メモや手紙、日記の類いは、活字化されることもあり、創作の舞台裏や作家の人間関係などを知る資料となっているが、それらも手書きのものを見れば、文字情報以外のものを読み取ることが出来ることもある。

中島敦展では、新しく寄贈された資料として、敦が南洋に行く前に深田久彌を訪ね、原稿を一読してほしいと頼んだ書き置きが展示されていた。自分の名前だけが印刷された名刺に小さな文字で長い文章を書き込んだものであり、なんとか作家デビューのきっかけを掴みたいとい

いう敦の必死さが伝わってくる。こういうものを見ると、全集に活字として収められているものを読んだときとは印象が違ってくるだろう。

南洋から子供や妻に宛てて書いた数々の書簡も展示されていた。これらもすでに活字化されているが、小学校二年生にも読めるように一旦書いた漢字を消して平仮名に直しているところなども見て取れ、敦の父親としての心遣いが感じられる。はがきの余白にあとから小さな字で書き加えているところもあり、活字では読み取れない思いを感じることも出来るよう。

作品の初出は、雑誌であることが多いので、その雑誌を見ることは、その当時の文学状況、あるいは世相を知る上で大事である。雑誌にはそれぞれ特徴があるし、同時代にどんな作家のどんな作品が載っていたのかを知ること、その作品を発表当時の状況に置いて考え直すことも出来る。時には、他の作家との交流を知ることもある。また雑誌の表紙や、掲載されている他の記事や広告なども、時代状況を知る上で役に立つ。

単行本は、装丁が興味深い。以前、日本近代文学館から、小説や詩集などの復刻本が出たことがあるが、本のハードとしての側面を見ることも、作家や作品についての理解を深めることになるだろう。たとえば、谷崎潤一郎が自ら装丁した創元社版『春琴抄』(昭和八年)は贅を

こらしたもので、作品の雰囲気作りに一役買っているし、谷崎の意図を汲むことも出来るだろう。パソコンの画面上で読んだときと、この装丁で読んだときでは味わいに格段の違いが出てくるだろう。もっとも、作家が装丁に関われない場合もあって、たとえば改造社の『新鋭文学叢書』(昭和五年)などのようなシリーズもの場合は、装丁が同じなので、個々の本から作家の思いに触れることは難しい。

作家本人の写真や、友人たちと写っている写真では、作品のモデルとなった人物を知ることが出来たり、交友関係を知ることにも出来よう。中島敦展では、敦の使っていた机や将棋盤などの日用品も展示されていたが、敦の趣味や生活の一端を覗くことが出来るだろう。

展覧会に行く一番の大きな目的は、このようなモノを見て、作品の鑑賞を補完することにあるとひとまずは言えるだろう。作家の展示では、その作家の創作の舞台裏を覗くことが出来ると言えよう。

では、仮に展示品がすべてレプリカであった場合、どういうことになるだろう。美術館であれば、レプリカがどれほど精巧であれ、本物を鑑賞することが出来ず、来場者は不満を持つだろう(レプリカを多く展示する徳島の大塚国際美術館のような例もあるが)。しかし、文学の展覧会は、文学作品の周縁にあるものを見るので、そ

れが仮にレプリカであっても、右に挙げたようなことを来場者が体験することは可能なはずである。しかし、もしそういう展覧会をやったら、来場者はかなり減るのではないか。「なんだ、偽物か」という落胆の声が聞こえてきそうである。だとすると、来場者の中には、展示を見ることを作品鑑賞の補完とは考えず、作家に関する本物を見ること、それ自体が価値だと考えている人がいるということになる。それは、遺物を崇拜する心理に似ていると言えようか。たとえば、落書きのようなもの書かれた原稿用紙でも、作家が手で触り、その上にペンを走らせたものであれば価値を生じる。作家が使っていた旅行鞆は、当時ありふれたものであっても、作家が使っていたことで価値が生まれるのである。

作家が崇拜の対象になれば、作家の遺物がフェティッシュ(物神)となり、ありふれたものでも価値を持ち、レプリカでは「ありがたさ」がないということになる。—— 文学館は、こうした需要に応える場でもあるわけなので、構成は二の次ということになる。

二 作家の展示

しかし、作家の展示には、もう一つの要素がある。その作家がどのような生活をしてきたか、どのような作品

があるかなど、作家についての知識を提供するという要素である。

中島敦を例に取ろう。敦の展示が最初に行われたのは一九九二年秋である。特別展「没後五〇年 中島敦展——一閃の光芒——」というのがそれで、県立神奈川近代文学館で開催された。編集は日本大学法学部教授であった田鍋幸信氏で、「生いたち——異郷で」「文学へのめざめ——学生時代」「横浜時代——なお高く上らむ」「夢と現実のはざままで——南洋へ」「彗星のように——作家の誕生、そしてすぐの死」という五部構成であった。生涯と作品を分けて展示・解説するのではなく、時間軸に沿って資料を見せる形である。作家の展示としては、オートドックスなものであろう。

二度目は二〇〇二年秋で、没後六〇年を記念して「収蔵コレクション展6 中島敦文庫」が開催された。前回から一〇年の間に敦のご遺族やゆかりの人々から寄贈された資料を中心に紹介するものであった。この展示は作家の全体像を提示するものではなく、新しく収蔵された資料を紹介することに重点を置いたものであった。

三度目の展示は、二〇〇九年夏、県立神奈川近代文学館の企画展「生誕一〇〇年記念 中島敦展——ツシタラの夢——」である。二〇〇六年に日大の「中島敦文庫」の資料が神奈川近代文学館に移管されて「中島敦文庫」

が一つに統合されたこともあり、その資料を用いての展示であった。展示の構成は「中島敦と横浜」「パラオ好日」「ツシタラの語り」「現代へ」の四部構成であった。通常、生い立ちから始めるところを、大学卒業後に住み始めた横浜から始めたのは斬新な展示法だが、この年が横浜開港一五〇周年記念の年と重なったための工夫だろう。

四度目が二〇一九年の秋の特別展で、池澤夏樹氏の編集による「中島敦展——魅せられた旅人の短い生涯」であった。「第一部 彷徨する魂」「第二部 実りの時」「第三部 生きている中島敦」の三部構成で、前回の展示から一〇年間に新しく寄贈された資料も展示されていた。また、「Time Travel」として途中に時代背景の説明パネルも展示されていた。当時の京城や南洋と日本の関わりなどの説明は、作品の理解に資するものである。

「第三部 生きている中島敦」は、敦の作品が戦後から現代に至るまで、どんな広がりを見せているかを紹介するものであった。

この展示では、第一部と第二部の分け方に無理があった。「実りの時」の部で紹介されている二冊の単行本には、第一部に属する時期に書かれた作品が入っているの

で、生い立ちから時間軸に沿って紹介されていると見て見ている人は、混乱しただろう。あえてこのような構

成を取る必要は感じられず、素直に時間軸に沿った紹介でよかっただろう。

中島敦が主人公の「文豪ストレイドッグス」とのコラボレーションもあった。ちなみに「文豪ストレイドッグス」とのコラボレーションは、最近はかなり多くの展示で見られるようになった。文学をマンガより高尚なものと考え人々には、文学の展示にふさわしくないと思う人もいるかも知れないが、文学作品を元にした映画、あるいはドラマなどが紹介・展示されることは以前からあった。たとえば、石坂洋次郎の作品を映画化したものは多くあって、石坂洋次郎記念館(秋田県横手市)では、そうした映画のポスターや、主演した吉永小百合の直筆の追悼文なども展示してあった。映画を契機に文学作品に触れることもあり、映像化されたものの紹介・展示は作家・作品についての理解を深めることにもつながるだろう。

中島敦関係では、もう一つ、二〇一八年夏に、日本近代文学館で「教科書の中の文学／教室の外の文学Ⅱ 中島敦「山月記」とその時代」という展示が行われた。日本近代文学館が四回にわたって、高校の定番教材となっている「羅生門」「山月記」「舞姫」「こころ」の展示を試みたもので、高校生の学習に資することを目的としたものであった。二回目の二〇一八年は、安藤宏氏と山下が編集を担当し、「山月記」や中島敦に関する資料を展

示し、同時代の状況についても資料を示して解説をした。この展示では、敦の原稿、絵はがきなどが展示されたが、すべてレプリカであった。

ところで、改めて言うまでもないことだが、展示は、展示する側がある意図を持って、想定される来場者にモノを見せるものである。展示する側が、資料を理解し、選択し、配置し、説明をつけるのであって、展示する側の主体的な行為である。その意味で、展示は常に主観的なものであって、客観的に見せるということはあり得ない。特定の作家の展示では、展示する側が、その作家や作品について理解し、価値評価をした上で「編集」するのである。であるから、館の職員が編集するにせよ、別に立てられた展覧会の編集者が編集するにせよ、展示にはその編集者が持っている作家像が反映することになる。

おそらく館の職員が編集する場合は、より一般的な理解に近づけようと、個別の編集者の場合はその人の理解を打ち出そうとするだろうが、いずれにせよ、展示はその編集者の持っている作家像が反映したものになり、展示の来場者は、その作家像に従って観ることになるのである。展示は、その点ではいわゆる「文学アルバム」を三次元にしたようなものである。そして、これを展示の主たる目的と考えれば、展示物がレプリカでも、

編集がしっかりしていて、明確な作家像が描けていれば、十分成立することになる。

そう考えてみると、展示は来場者に、作家について書かれた本を読むのと似た経験をさせていることになるだろう。展示における編集者と文学館は、本における著者と出版社の関係に近い。展示会場で文学作品そのものを読むのは、詩歌以外では難しいが、その一部分は読むことが出来ることも考ええると、作家についての評伝・概説書に似ていると言える。

もちろん、提示された作家像が編集者の個性が強く出ている場合、来場者が違和感を覚えることもあるだろう。自分のイメージを壊されたと思う人もいるだろう。しかし、それは作家について書かれた本を読んで感じる違和感と同様のものであって、学問的な裏付けがあって、恣意的でない限りは許容されるべきだろう。

三 展示から教育へ

周知のように、二〇二二年度から高等学校の国語の科目構成が変わり、「論理国語」「文学国語」が選択科目として登場する。「論理国語」は主として、「創造的・論理的思考の側面の力を育成する科目」として、実社会において必要となる、論理的に書いたり批判的に読んだりする資質・能力の育成を重視した科目」であり、「文学国語」

は主として「感性・情緒の側面の力を育成する科目」として、深く共感したり豊かに想像したりして、書いたり読んだりする資質・能力の育成を重視した科目」であるという。国語をこのように分けることが、教育的見地から妥当とも思えないが、「文学国語」が選択科目となれば、生徒が文学作品に触れる機会が減っていくことになるだろうし、国語の授業で文学の魅力に気がつく人も減るだろう。文化の基本に言葉がある以上、文学が読まれなくなったり、書かれなくなったりすることはないが、マンガも含めて映像文化の地位が高い日本文化の中で、さらに文学への関心は下がることになるだろう。

そうなると、文学の展示をしてきた文学館も無用の長物になりそうだが、しかし、逆にこれをきっかけに文学館が発展する可能性があるとも言えるのではないか。先に述べたように、文学館は作家や作品についての概説的な役割を果たしうる。高等学校の国語の授業で、文学教材について教えられている内容を、文学館の展示がすべて代替することは出来ないが、モノを見せることを入り口にして文学への関心を広げ、さらに文学講座・講演会などを開催していくことは可能だろう。それには、展示や講座の質を上げることが重要で、見識のある職員、編集者が関わることも必要となろう。

文学館は、博物館と図書館の機能を併せ持ち、更に講

座などを開くことすでに生涯教育の機関のような役割を担っているが、その対象者を若者に拡げていく工夫が求められよう。若者も対象に含めた教育機関の役割が期待されるのではないか。従来、作家の展示は、どちらかと言えば、本物を見たいという愛読者の存在が前提で、その気持ちを満足させることに重きを置いてきたように思う。だが、文学への関心も薄れていくことが予想される現在、今後の展示には、文学に興味を持つ人を増やすことの方が求められるのではないか。

【付記】

本稿は二〇二〇年度の中央大学特別研究の助成を受けて成ったものである。

(やました まさふみ 本学教授)

